

慶蔵院寺報

公孫樹

2021年3月発行

第110号

浄土宗慶蔵院

伊勢市小俣町元町 1211

TEL 0596 (22) 3726



境内の大イチョウと黄金樹

西里定一 画

横井久美子からのメッセージ

一九七五年、ベルリンで開かれたPSF(ポリティカル・ソング・フェスティバル)に横井久美子はアジアからただ一人、招待され参加しました。二十八か国、一三六人の演奏家が集まりました。このとき、特別コンサートとして七三年のチリ軍事クーデターに抗議する国際連帯コンサートも開催されました。

横井が招待されるきっかけになったのは、クーデターで倒れた故アジエンテ大統領夫人の来日歓迎集会で、南米を代表する音楽家ビクトル・ハラ
の歌「ベンセシモス(我々は連帯する)」を七四年に、横井が歌った縁から
でした。ビクトル・ハラは、チリスタジアムに集められた五千人もの人々
の前で、見せしめとして銃殺される時、この「ベンセシモス」を歌ったそ
うです。

私が高校教師として尾鷲に赴任した年が七三年ですから、これらの出来
事は自分史の一コマとして鮮明です。それから五十年、日本や世界はどう
なって来たでしょうか。歴史は進歩の方向にすすんでいるといえるのでし
ょうか。ミャンマーでの軍事クーデターも起こりました。こんなことでい
いのか…。このままではいけない。なんとかしなくては…。新型コロナの
登場は、自然・宇宙・神・仏からの警鐘のようにも思えてきます。

西里さんは言います。扉絵の、この支え合っている樹々の姿、老木を抱
き護ろうとしているイチョウの樹の姿に慈愛を感じて絵筆をとった…。と。
忘れてはならないもの、伝えなければならないものがあります。

横井久美子がベルリンで知って、励まされたことは「それぞれの国の音
楽家が、さまざまな困難に屈せず演奏活動を続けている」ことだ…。横
井はベンセシモスを日本語に訳して歌いました。「祖国の大地深く、叫び
がわきおこる…。鎖を打ちきりつ…。苦しみをのりこえよう。ベンセシモス」
と。いま、正しい未来の選択は、私たちの手に握られています。

3月の行事予定



3日(水)	写経 映画会	午前10時～ 午後7時半～
10日(水)	念仏会	午後7時半～
17日(水)	健康教室 歩き方教室 講師 馬場久美子先生 男性詠唱隊	午後1時～ 健康教室・歩き方教室 参加費500円 午後7時半～
20日(水)	春彼岸会	午前10時～
24日(水)	読経会	午後7時半～
25日(木)	戦没者慰霊	午前11時～
12日・26日(金)	茶道教室 講師 河井宗恵先生 樋口宗恵先生 田島宗紀先生	午後7時～子ども茶道教室 午後7時半～大人の茶道教室 ※ 子ども無料 大人500円.
11日(木)	ともいき英語サロン 講師 三浦邦昭先生	午前10時～11時半 午後1時半～3時 参加費1000円
予約があれば水曜日	キサンシンギングボウル ヒーリング	.要望に応じて30分～60分



慶蔵院豆知識

⑦

境内も森だった

下小俣の長老から伺った話です。「境内の裏は川で、よくカニを採って遊んだ。堤防から用水路を抜き、寺の森を廻って中小俣を左に折れ、水を川に戻していた。堤防の決壊を防ぎ、水害を避けて、村を護るためだった」と。

何もかも変わってしまい、用水路も無くなってしまったが、裏庭の手水鉢の周りには、赤手蟹がよく顔を見せ、子どもにせがまれ、手を挟まれながらカニとりをしたものだった。

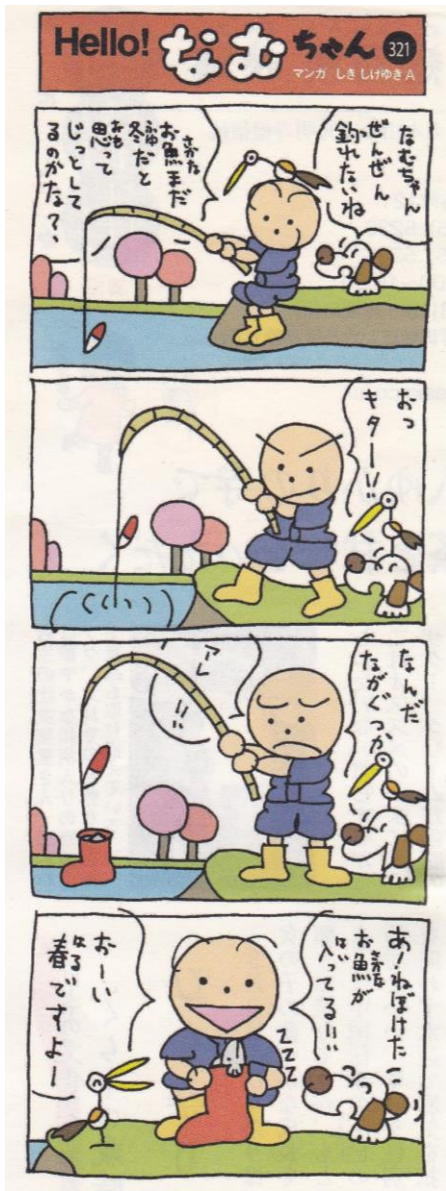
ある日、境内の森の中をゴソゴソと歩いていると、大木の根元に無色透明なすりガラスで創ったような「キセル」状の植物を見つけた。見たことのない不思議な恰好の植物に驚いて、箱に深々と納め、自転車に乗って、植物学者で名高い、八日市場にお住まいの孫福正先生宅に走った。

新種の植物を発見した心持で、ワクワクしながら先生に見ていただいた。第一発見者として私の名前をつけてくださるかも知れない……と。

しかし先生は、「ニコニコとお笑いになって」「これは、ギンリョウソウです。これが境内の森にあったのですか……。」と即座に言われたのです。新種かと思っていた私は穴があったら入りたいほどの恥かしさでいっぱいになったことを覚えていきます。

銀竜草と書き、ユウレイタケとも呼びます。山林の落葉中に生えると辞書にありましたが、この頃では、見かけなくなりしました。





浄土宗新聞より



ケーブルテレビ (ztv) 伊勢放送局
 コミュニティチャンネル (12CH)
母 (91 歳) が出演することになりました!!
「年寄万歳 ～百歳になったら～」
(10 分番組)

いつも母の「慶蔵院豆知識」を読んでいただき、ありがとうございます。読んでいますよ」という声を励みに、母は先へ先へと原稿を書きため、寺報の発行が追い立てられております。

先だって母は、ケーブルテレビの90～99歳対象番組に出演を依頼され、14日・15日に取材を受けました。

新型コロナの流行もあり、なかなかお年寄りの出演者が見つからなかったようで、急ぎよ取材が決まりました。

病状が回復しても、なかなかお檀家の皆さまにお会いする機会がなかった母ですが、今回の番組を通して元気になった母の素のままの日常生活を垣間見ていただければありがたく存じます。

放送日時 <u>3月1日～7日</u>		
8:15～	10:30～	14:15～
17:15～	19:45～	22:00～
<u>3月8日～15日</u>		
8:15～		

新しい自転車走る孫娘
 奥田 悦生
 () 「知恩」誌三月号「柳壇」に掲載

☆「連絡」☆
 ※お塔婆の申し込みは三月八日までにお願います。
 寺世話さんにお申込みいただくか、直接寺までご持参ください。
 ※今月より行事を通常通りの行います。
 参加いただける方はよろしくお願います。

春彼岸会
 三月二十日 (土)
 十時～ 法話
 十時半～ 彼岸法要
 終了は十一時半頃の予定です。
 皆様お誘いあわせの上、
 お参り下さい。



風船は
才モリが
なぐてはあがらぬ
人生にも
苦勞や不幸が
あつて
信仰はあがる
中野善英上人

糸の切れた風船はどこに飛んでいくかわからない。私たちの日々の生活、人生が「糸の切れた風船」のようであつていいのか…と思ひ悩む。糸に繋がれていたままでもためだろう。本当の「自由」がない。その場にとどまっているだけでは成長も発展もない。

私たちは、みな世の中とかかわっている。現在のコロナ禍、東日本大震災から十年をへても、まだ見えてこない福島原発放射能汚染解決・解消への進むべき道筋。いや、見えているはずなのに、一向に進まない現実。

横井久美子は歌った。

「時は流れて、人は去り行く。何という胸の痛みだろうか。あまりに世界が傷つき過ぎた。…何という胸の痛みだろうか。けれど私に、出来ることは少ない。」と。

明治を生きた青年たちは、友人同士、挨拶の代りに、「のおー、悲しいではないか…」と世の中を憂う言葉を交わし合っていたと聞いたことがある。解決の糸口が見えてこない閉塞状況を、わが胸の痛みとして受け留めていたのだろう。しかしここに出発があるのではないか。

横井は続けて、三度、繰りかえして歌った。

「自由を求め、さまよいつづけ、野に果てるとも、明日を信じて。…明日を信じて。…明日を信じて。」と。

重りがあるから風船はまっすぐに上がっていくことが出来る。そしてまた重りがあるから新天地に降りることもできる。「重り」を探さなければならぬ。

私にとって、風船の重りは「念仏」である。横井久美子の歌を南無阿弥陀仏と「重り」にして、その指し示してくれる道を歩まなければならない。明日を信じて。